

「底が突き抜けた」時代の歩き方 102

「国のために死ねなくなった」方向に宙吊られている日本

映画『シュリ』に社会学者の宮台真司は、金大中大統領が押し進める「太陽政策」の「社会哲学的な根拠」を見出していたが、『S A P I O』（00・8・23 / 9・6）も、「金大中大統領が進める北朝鮮との宥和政策に対しては、一部に時期尚早論を説く者はいるものの、韓国全体としては歓迎ム・ドが溢れている」として、6月の南北首脳会談直後に韓国統一省が実施した世論調査を報告している。それによると、「北朝鮮を『敵』とする韓国人はわずか2・7%。また『中央日報』の調査では約66%が『朝鮮半島ではもう戦争はない』と答え、『もう戦争はない』と宣言した金大統領の言葉に同意する結果となっている。」

また『S A P I O』の同文章には、「南北会談以降、38度線の最前線の兵士たちには北への敵対行為は絶対とるなという指令が出ています。今年も8月22日に恒例の米韓合同演習が行なわれますがシミュレーションのみになりました。今、金大中批判は絶対のタブー。現在軍内部で金正日を“戦争狂”と呼ぶのは裏を返せば、それに太陽政策を施している自分のトップを、分かってないやつだと侮辱することになります」という「韓国に詳しいある軍事ジャーナリスト」の話を掲載して、「南北会談という軍事力行使を一切伴わない金正日の『赤化大作戦』はまさにボディプロのように大成功し、韓国軍を窮地に追いつめている。であれば、逆に今こそ軍のみならず韓国国民にとっても、現在の宥和ム・ドを擲擧するような挑発的な“発禁漫画”も許される言論の自由が必要なのではないか」と締め括っている。

小林よしのりの漫画『ゴ・マニズム宣言』を連載している『S A P I O』からすれば、金大中大統領の「太陽政策」は、「北という鏡に20年以上前の自画像を映し出しながら『もはや国のために死ねない』地点にまでやっと到達した自らの国」が、「国のために死ぬる」北にむかって「責任感ゆえの善意と温情」を差し伸べるという宮台真司説のようなものではなく、金正日の「赤化大作戦」にはまる愚策ということになるのだろう。この見解には当然のことながら、少女拉致や工作員潜入、テポドン発射等のさまざまな日本国を無視した不法行為を繰り返す北に対して、日本は南の「太陽政策」に影響されることなく、断固とした敵対政策をとりつづける必要があるという主張がこめられている。

宮台真司の文章の表題が、「映画『シュリ』に、日本を超えた韓国の高い民度を見る」とあるように、彼の予先は本当は南の「太陽政策」の真意を解さずに、「冷戦崩壊後の軍事バランスを考慮した戦略的有效性という観点からのみ評価する」日本のインテリた

ちや、『S A P I O』に代表される自由史観的見解に向けられている。「『友愛』と『共同体的献身』の背反を知らない平和ボケの土建屋系・宗教団体系・組合系の政治屋に、どこもかしこも覆われて」いる日本の現実、「『先の大戦で死んだ若者たちは親しき者を守るために戦地に赴いた』などとホザく三流漫画家の尻馬に乗って、アリストテレス的な緊張も知らぬまま、『共同体的献身こそ公だ』などと言う愚かな者どもが論壇誌を埋め尽くす日本の現実、「『国のために死ねない』ことを憂う無教養者があふれる我が日本の現実」に異議を唱えるために、映画『シュリ』について語っているのだ。

「親しき者のために戦地に赴く」ことが、人間の自然感情に逆らう命題であることはいうまでもない。戦地などに赴かずにいつまでも親しき者の傍らに居続けたいというのが、人間にとっての自然だからだ。ところが、人間が反自然としての国をつくりだしたとき、もはや人間は自然のまま生きることができなくなった。自然のまま生きることができなくなった人間（国民）を、親しき者の傍らから引き離して、戦地に赴けと強制するのが国である。だから、「親しき者」と「戦地に赴く」という本来背反する概念を、国が強引にくっ付ける詐術を行うのは、国をつくるという最大の矛盾の中に人間が放り込まれていることを意味する。もちろん、小林よしのりの頭ではこのような国家的詐術も、人間を見舞っている最大の矛盾も理解できない。

しかしながら、「親しき者のために」という大義や名分をくっ付けようとくっ付けまいと、戦地に赴かざるをえないという現実が続いている。そのなかで、「戦地に赴く」けれども、けっして「親しき者のために」なんぞではないと思うようになることは、戦争に対する意識の大きな変革をもたらした。「親しき者のために」という国による戦争正当化に気づき、「戦地に赴く」のは本心からではないという気持が率直に表出されるようになった。宮台真司が「親しき者のために戦地に赴く」のではなく、「人々の自由を支える血で購われた公共財を守るために戦う」という公共的動機づけで、近代社会は「戦地に赴く」理由を見出したというとき、その動機づけの最大の変化はそこで生還の意志が明確にされたことであると思われる。

「親しき者のために戦地に赴く」という論理は、おまえが戦地に赴かなければ、お前の親しき者は殺されることになるぞ、だからお前は彼らの捨て石になれということであり、親しき者のために戦死することは最高の美德として奉られるということであった。その底に流れるのは、生きて還ってくるな、立派に戦って死んでこい、というものであった。このことは、国は兵士たちをすでに死者として扱っていたということを意味する。だが、「公共財を守るために戦う」という近代社会の論理を支えるのは、一時的な戦争状態から無事に生きて帰ってこいという希望の論理であった。「国のために死ねる」国はすでに死んでいる人間を戦地に送り込むのに対して、「国のために死ねなくなった国」は生きている人間を戦地に送り込み、結局のところ、死者と生者の戦いは生者に軍配が上がるようになっているのである。この世は生きている人間の世界であるからだ。

「親しき者のために戦地に赴く」という論理が「国のために死ねる国」において欺瞞で

あるのは、親しき者の記憶（たとえば写真等）を断ち切らねばならなくなるからである。本当の意味で「親しき者のために戦地に赴く」のなら、親しき者の記憶を一杯詰め込んで戦地に赴き、そして戦地から親しき者のところへ還ってくることが予定されていなければならない。ただ、「記憶が薄れれば、近隣の間関係のために地上戦に出かけることは不可能になる。それがピンポイント爆撃に象徴される遠隔操作のハイテク兵器開発を動機づけ、米国の軍事覇権を支える。韓国『ですら』同じだ」と宮台氏が押さえている点も、考慮する必要があるだろう。

宮台氏の見方に沿えば、「分断の50年」の悲劇的な緊張関係のなかで、韓国は北に「20年前の自分たち」を映し出しながら、「国のために死ねなくなった」方向を肯定的に歩んでいるイメージが得られる。翻って日本では「『国のために死ねない』ことを憂う無教養者があふれ」返っている。一体、その落差はどこからやってくるのか。もちろん、韓国のように日本は、もはや「国のために死ねなくなった」戦後社会の現実を肯定できなくなっているからだ。援交少女やガングロギャル、青少年の凶悪犯罪を生みだしている戦後社会のほうが、神風特攻隊員を生みだした戦前社会より（はるかに）マシであるとはっきりと言えなくなっているのである。それは、「国のために死ねる」現在の北のなかに韓国が戦前日本を強力に映し出そうとする鏡を、日本の戦後社会が持ちえていないからだ。現在の韓国がそうしているように、北の「国のために死ねる国」に日本が「国のために死ねなくなった国」として肯定的に対するのではなく、北との緊張状態のなかで日本はかつての「国のために死ねる国」に戻って、北に対しようとするのである。立往生している戦後日本を少しでも前へ押し進める方策に真正面から取り組むのではなく、立往生状態の戦後日本を否定して戦前日本に戻り、根本問題を解決しようとするのだ。もはや戻れないことが国際的にも明らかであるからこそ、気分はどうしても滅私奉公を一直線に突き進みたくなくなっているのだ。

2000年9月16日記